
岡村 優 美術領域 2回生
村田 遼平 家庭領域 2回生

Bij.project

(ビジ. プロジェクト)

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの目的

私たちは、鑑賞者に発見や、美術の可能性を肌で感じてもらう事が出来る展示方法の提案を目的として、特に「参加性」に重点をおき、活動を行ってきた。この活動を通じて、制作者と鑑賞者の関係や美術とはどのようなものであるかを考えるきっかけとなることを期待している。

2. 代表者および構成員

・代表者

森 美由紀 美術領域 3回生

・構成員

一居 修弥 美術領域 3回生

葛本 康彰 美術領域 3回生

柴田 大介 美術領域 3回生

野中比香里 美術領域 3回生

山城 梓 美術領域 3回生

秋岡真奈美 美術領域 2回生

朝田 夏美 美術領域 2回生

上妻 香菜 美術領域 2回生

皿谷友里恵 美術領域 2回生

杉田知早都 美術領域 2回生

西菌 静 美術領域 2回生

中野 源大 理科領域 3回生

春名 由貴 理科領域 3回生

・構成員以外の協力者

織田こるり 美術領域 4回生

左司 裕美 美術領域 4回生

柴田奈保子 美術領域 4回生

田上 智之 理科領域 3回生

3. 助言教員

小林 良子先生 (美術科)

第2章 内容や実施経過など

1. 実施経過

毎週集まり、ミーティングを行う。

6月 月曜日の活動、水曜日の活動の2つのグループに分け、具体的な案を出し合う。

7月 1～3名のグループに別れ、制作のイメージを明確にしていく。

8月 物品を取り寄せ、試作を行い検討する。

9月 各グループで検討を重ねる。

10月 制作、展示マップ作成、ロゴの作成、ポスターの作成。

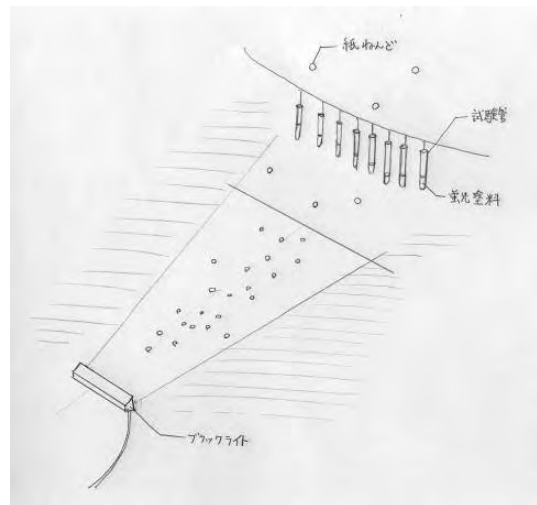
11月 藤陵祭での展示準備。発表、アンケート調査。

12月 「巻き込み型アート」を行っている人物、作品について調査し、自分たちの展示方法と比較する。

1月 反省会を行う。

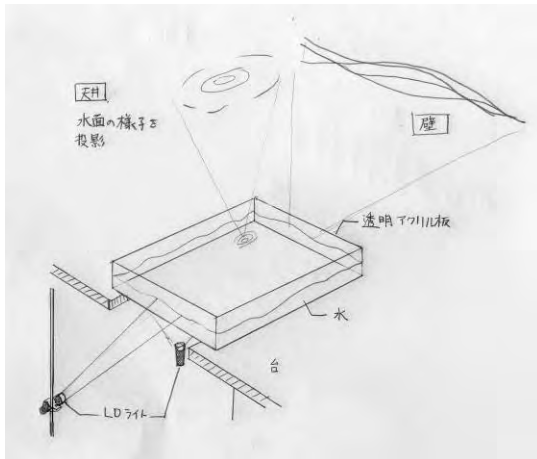
2. 実施内容

・試験管と蛍光塗料による作品展示



以前から試験管に興味を持っており、暗闇の中に蛍光インクを入れた試験管を並べ、床に白い紙粘土を散らばらせ、ブラックライトを当てる事により、不思議な空間を作った。見る人が、「美しい」「恐ろしい」等、様々な感情を抱く事を期待した。

・水と光による展示



美術としての表現を、美術的な要素だけでなく科学的視点からのアプローチも含め、どのように参加型の作品とするかに重点を置いて試行錯誤を行ってきた。水の揺らぎを天井に投影する事で幻想的な空間を作り出す事ができた。

・しゃぼん玉を紙に吹き付ける展示、ワークショップ



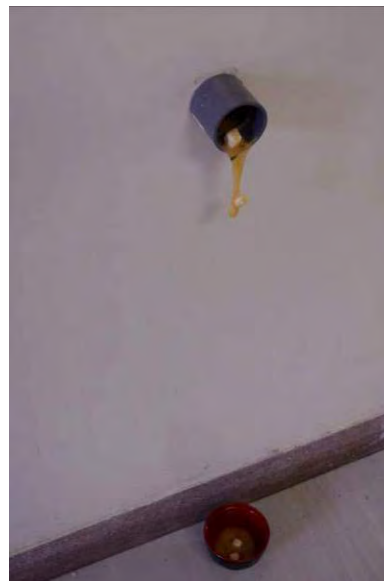
子供たちの遊びの一つであるしゃぼん玉を使い、絵を展示するとともに、ワークショップを開催し、実際に同じ方法で作品を作ってみる活動を行った。大人から子供まで楽しんで制作する事が出来た。

・身近な素材をつかった小さな部屋の展示



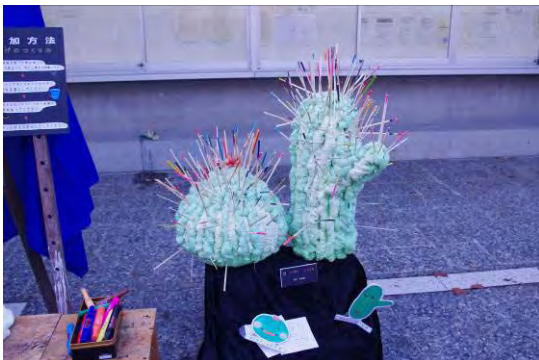
子どもが楽しめる物が作りたいと考え、扉をあけると、普通の部屋ではなく、面白おかしい、あり得ない世界が広がっていたら面白いと考え、制作した。

・配水管からあり得ない物が流れ出る展示



主にカネダインと紙粘土を用いて制作した。いかに本物に近づけるかという事に着目し、見る人に驚きを与えられるように質感と細部にこだわり、試行錯誤して制作を進めた。

・割り箸を使ったエコアート



「身近な木材資源とその有限性」をテーマに、使用済みの割り箸や竹串を針に見立ててサポテンに刺していくという鑑賞者参加型エコアートを企画した。藤陵祭期間中に実施したところ、幅広い年齢層の方々が参加して下さった。

・アート広場



床や壁一面に白い紙を敷き詰め、子供たちが自由に絵を描く事が出来るスペースをもうけた。身体全体をつかって絵を描く子供たちの楽しそうな様子が見られた。

・光のアニメーション

夜の学校を使い、協力者の方々と共同でアニメーション作品を制作した。藤陵祭の展示期間には、映像を流すとともに、空間に光で絵を描くワークショップも行い、数十名の参加があった。



第3章 結果やなど成果

1. 活動から得られた成果

Bij.project では、「見るだけ」の鑑賞ではなく、鑑賞者が様々な形で作品と関わりあうという「参加性」のある鑑賞について研究を行ってきた。そして2010年11月「参加性」を実現する展示方法の提案と検証を目的とした作品展『ART BOX』を藤陵祭において開催した。

今回は、作品展の実施によって得られた結果のうち、研究テーマに関連した注目すべき点について述べていく。主に次の三点である。

① 鑑賞者との作品の「共有」

『ART BOX』では「参加性」を実現すべく、鑑賞者が触れたり描いたりすることで変化する作品を展示した。水と光による展示や、割り箸を用いたエコアート等がこれにあたる。また、制作者と鑑賞者が共に作品をつくるワークショップも行った。しゃぼん玉を紙に吹き付ける展示には大人の方々が来て下さり、アート広場には子ども達が参加してくれた。

それぞれの参加者の年齢層は異なるが、いずれにおいても参加者（鑑賞者）との作品の「共有」が行われていたと考える。制作者側が一方的に作品を提示するのではなく、鑑賞者と制作プロセス、時間、場所を分かち合ったのである。来場者の方々を対象としたアンケートに書かれていた「作品に触っているいろいろな発見があった」「実際にシャボン玉で絵を描いてみて驚き感動した」等の感想からもそれをうかがうことができる。制作者と鑑賞者、両者が互いの存在

を認識し、時には互いの立場を交換すること、すなわち「共有」は「参加性」と密に関連しているということが分かった。

② 他専攻どうしの「連携」

今回の展示では、美術領域専攻と理科領域専攻の学生が連携して企画、運営を行った。その目的は主に二つある。

一つ目は、内容の充実度の向上。美術と理科、それぞれの持つ知識や思考などを組み合わせることにより、多面的な見方のできる展示を行うことが可能になると考えた。

二つ目は、鑑賞者の立場にたった展示の実現。あまり美術に詳しくない鑑賞者も理科という視点が加わることにより、作品に興味を抱き「参加性」のある鑑賞へと導かれるのではないかと考えた。

以上二点の目的が最も強くあらわれ達成できたのは、水と光による展示である。水槽に入れられた水に触ると波紋が天井や壁に投影されるというもので、幅広い年齢層の方々が参加して下さった。自らの手から美しい波紋が生み出されるという美術的な感動と、懐中電灯一本で不思議な空間を作り出せるという理科的な感動の両方を覚えた方が多かったようである。

今回は、作品展示に他専攻の新しい風を入れるという試みが達成されたとともに、異なる分野の者どうしで協同することの重要性を学ぶことができた。

③ 京都教育大学という「場所」の力

藤陵祭は京都教育大学の代表的な行事であり、周辺地域等から多くの方々が来場される。来場者の年齢層は幅広く、小さな子どもから高齢者まで、まさに「老若男女」が集う場であると言える。『ART BOX』の参加者にもこれと同じ特徴がみられた。

また、今回の作品展では大人を対象とした展示と子どもを対象とした展示の両方を用意したところ、どちらか一方に参加者が固まるとい

うことは無く、それぞれを行き来する方々が多かった。参加者の年齢層を改めて分析すると、親子連れの方が全体の三分の二を占めていたということが分かった。

おそらく、京都教育大学が教育と関係している場所であり、子どもを安全に遊ばせることのできる場所であるというイメージが、このような参加者層を作り出したのだと考える。鑑賞者の作品への興味、そして「参加性」の実現には、作品そのものだけでなく「場所」の持つイメージおよび力が関係するのだということが分かった。

以上三点について述べてきた。今回の活動全体を通して分かったのは、「参加性」のある展示とは「展示→共有→発見」のプロセスを踏む展示であるということである。まず、制作者が作品を展示して「参加性」のきっかけを作る。次に、制作者と鑑賞者がともに作品を共有する。そして、互いの存在や作品そのものに新たな発見をする。この流れが、「見るだけ」の鑑賞を「参加性」のある鑑賞へと昇華させるのではないかと考える。

しかし、「参加性」とは様々な意味を持つ言葉であり一言では表現できないため、今回出した結論が完全なるものであるとは言えない。

2. アンケート調査から得られた結果と考察

11月の藤陵祭期間中に行われた『ART BOX』にてアンケート調査を行った。幼稚園児や小学生の親子連れが多かった事もあり、回収率は低いものだったが、貴重な意見をいただく事が出来た。

①年齢増の調査

計 21 名

小学生以下	2名	小学生	2名
中学生	1名	大学生	8名
20代	1名	30代	1名
40代	4名	50代以上	2名

②感想など

- ・自由に触れられる事が楽しかった。
- ・作品の説明聞きたかった。
- ・大きな絵が描けて楽しかった。
- ・ギャラリーよりも気軽に楽しめ、よかった。
- ・ちょっとした発想でアートが出来る。私もやってみたい。
- ・階段や廊下にももっと展示をしてほしかった。
- ・大学で楽しんで勉強している様子がわかった。

アンケート調査より、展示を楽しめたと回答した人は100%（回答者21名）であった。肯定的な意見も多く得られたが、宣伝不足についてや、場所がわかりにくいなどの反省点も得られた。また、大学生の展示ということもあり、制作者が作品の近くにいるため、ただ展示してその様子を傍観するのみでなく、言葉を通じて、自分の作品の意図や魅力を伝える事で、さらに共有が進むと考えられる。また、鑑賞者がそれを望んでいるという意見もいただく事が出来た。

次は、作品展の反省を踏まえながら今後の展望について述べていく。

第4章 プロジェクトに関わる今後の展望

今回のプロジェクトにあたり、「参加性」という事をそれぞれが消化し、自分やグループを通して考えや思いを表現していこうと試みる事が出来たと感じている。「参加性」、「鑑賞するにとどまらない美術のあり方」というテーマ自体が難しい物であり、それを消化するだけでも大変な物であった。今回の藤陵祭期間中の展示がこのテーマの成果ではなく、答えでもないように感じる。今回の活動はこのテーマについての答えを出すための第一歩というところである。展示会を行う事で、考えが初めて現実味を帯びてくる。自分たちの想定外の事がこの展

示会の中でたくさんおこり、自分たち制作者側と鑑賞者側の関係も垣間みる事が出来たように思う。私たちの掲げたテーマを深めるためには今後とも断続的に展示会を行い、鑑賞者から感じた事や思った事をフィードバックしていただく事が必要であると感じる。また、今後展示会をさらに意味のある物としていくためには、1回、1回の反省も重要である。今回の展示会から得られた反省としては、大きく2つある。まず一つ目としては、宣伝の不足である。私たちの活動は鑑賞者がいる事が大前提である。展示を行っている事を一目で分かるような工夫やパフォーマンスが必要であったと感じている。2つ目としては、空間の使い方である。今回の展示では主に2号館北側を使用した。2号館は元々複雑な構成の棟になっており、初めて来た人々にとっては少々わかりにくいものであった。地図や足跡等の印を用いても迷ってしまう様子が伺えた。さらに要因として、もう一つ考えられるのは、作品の数と規模である。2号館を大きく使っているにもかかわらず一つ一つの作品が小規模で点在していたため、見つけにくいものであったように思う。2号館という学校ならではのスペースを有効に使い、特別な空間に引き込むような作品の提示ができるとさらに魅力的であったと感じている。

反省点はたくさんあるが、今回のプロジェクトから得られた成果は大きく、私たちのテーマに対する答えの糸口がつかめたような感じがしている。今回得られた物をさらに生かし、今後とも活動を継続的に行っていきたいと考えている。